
運命の狩人

ソラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の狩人

【Nコード】

N6884R

【作者名】

ソラス

【あらすじ】

答えを得た弓兵。彼は新たな世界で何を為すのだろうか。

プロローグ（前書き）

この作品には以下の要素含まれる、または含まれている可能性があります。

- ・初 投稿
 - ・フロム脳的世界観、設定の自己解釈
 - ・キャラの性格の掴み損ね
 - ・公式設定との相違
- 後半については努力しますが、これらについて
じよ、冗談じゃ…
撤退だ、撤退する！
等と思われた方は退避なされたほうがよろしいかと

プロローグ

「大丈夫だよ遠坂。オレも、これから頑張っていくから」

「む…ここは…」

意識が覚醒する。

辺りをみまわしてみるが、何も見えない。いや、”何も見えるものが存在しない”と言っべきか。周囲は暗闇の様に黒一色だというのに自分の身体だけははっきりと見える。そんな、異常な空間の中。自分は先程あの丘で彼女に別れを告げ、消え去った筈だ。ならば、この場所は…。

「聖杯、か」

それ以外に思い当たる節がない。まだあの地にある大聖杯は健在の筈だ。此処はその中なのだろう。いつまで此処に居られるかは分からないが、そう長い時間ではないと思う。

また…人々を虐殺する日々に戻る。だが、今までとは違う。

——あのような台詞を吐いたのだ。例え彼女の目に映らなくとも、変わらなければ格好がつかないではないか。

「惜しむらくは、この記憶が単なる記録へと成り果ててしまうことか」

一度座に戻れば現世での全ての記憶は記録へと変わる。未来の自分はその記録を見て、今の自分と同じく頑張ろうと思えるだろうか。そこだけが心配ではあるが…。

「ほほう、つまり出来るならその記憶をなくしたくはないということかの？」

「っ!？」

驚愕する

それは先程まで誰かの気配など微塵も感じなかったことに対して。そして――

「宝石翁…!？」

突如現れた魔法使いに対して。

「久しぶりじゃのう錬鉄の英雄。いや、お前さんとははじめましてじゃったか…」

「…そんなことはどうでもいだろう。何故貴方の様な御仁が聖杯の中に…」

目の前の人物については疑問が尽きない。

何故此处にいるのか。

どうやって此处に辿り着いたのか等。

ひとつめの疑問の答えは…

「それなんだがのう、此处は聖杯の中ではないぞ」

「…なに？」

もしその話が本当ならば、この老人の存在も説明がつくだろう。
——だがそれは同時に私の存在に説明がつかない話でもある。
それに、此処が聖杯でないならば、いったい何処だというのか。

「此処は儂が一時的に造りだした空間。世界の目をごまかす為の、
な。あの場で聖杯に吸収されかかっていたお主の魂を人形に固定化
し、此処まで持ってきたんじゃない」

放たれた言葉は、私をさらなる混乱へと導くものだった。
先程から疑問は増える一方だ。何が、一体、どうなっている？

「魂の固定化だ！？馬鹿な、その魔法の使い手は——」

「すまんが、余り時間はないんじゃない。お主の疑問全てに答えておる
余裕はない。…これから用件を話す。一つだけ答えて欲しいものも
ある」

宝石翁直々にそんなことをするのだ、余程重要な案件なのだろう。
そう思い口を閉ざし、続きを促す。

「可愛い弟子の頼みでな、これからお主を平行世界に飛ばす。守護
者等というシステムが出来る前から分岐した、平行世界と言うよりは
異世界と言った方がいいか、そんな世界にな。お主はこの話を受けるか
？」

成る程、確かにその方法ならあの忌まわしきシステムから脱するこ
とも出来そう。しかし、一つ聞いておきたいことがある。

「…その弟子の名は？」

薄々は感づいている。宝石翁の弟子になれるほどの繋がりと才能の持ち主で、私などの為に動いてくれる人物など――

「遠坂 凜」

――彼女しかないだろう。

「感謝せいよ？至ったあ奴はただひたすらこの舞台を作り出す準備をしていたのだから。」

「そうか、彼女は、至れたのか」「当然じゃろう。儂の弟子なのじやからな。…ではそろそろ返答を聞こうか」

――やれやれ、どうやら私は、彼女にはとことん苦勞をかける存在らしい。

「ほかならない彼女がそこまでしてくれたんだ。是非とも受けさせてもらおう」

断るという選択肢は存在しない。守護者に戻りたくない、というのものもあるが、何よりそれが彼女の願いであるから。

「そうか、それは良かった。説得に失敗すれば後で何を言われるか分からんのでう。…では儀式はこちらで進める。完了するまで、しばし眠るといいじゃろう」

次に目を覚ませば、そこは異世界、ということなのだろう。

私は、そこで何を為せるだろうか…。

「そうか、本当に、感謝するよ宝石翁。私からは何も返せないのが悔やまれるが…」

「じゃから感謝ならあ奴にしてやれと言っておるじやろ。儂の力添えなど微々たるものじゃ。…ああそうそう、お主にあ奴から伝言があつたのう。いや、”うっかり”伝え忘れるところじゃった」

…なにやら不穏な単語が聞こえた気がする。

いや、師弟であつて血縁関係ではない筈だ。だから大丈夫、うっかりなんておかさないさ。多分、きっと、おそらく。

「『頑張りなさい、ほかならないあんたの幸せのために』じゃそうじゃ。まったく、愛されておるのう」

老人は快活に笑いながらそういった。こちらも自然と笑みがこぼれる。

「ああ、まったくだ。…宝石翁、私からも彼女に伝言をお願いしたい。ただ一言、ありがとう、と」

「ああ、お安い御用じゃ。…では、そろそろ始めようかの」

此处での時間は終わりの様だ。未だ疑問は尽きないが、今となつては瑣末なことだと思える。

さて、しばし眠りにつくとしよう――

――寒い。

最初に感じたのは肌を刺すような寒さ。
目を開けて飛び込んできた光景は――

――極寒の雪山だった。

プロローグ（後書き）

ヤッターター

本編の補足

至った凜、つまり聖杯戦争の未来の凜がどうして戦争終了直後のアーチャーに干渉出来たかという点、『魂の物質化』と『時間旅行』の魔法の使い手が存在する平行世界を探しだし、協力を依頼した、という設定です。（バゼットさんがhollowで『時間旅行』の魔法を示唆していることを元としています）そこまでやっておいて何故登場しなかったのかというと、うっかりを自覚しているから。余計なミスを減らすために宝石翁に大詰めを任せました。

こんな文章な上に不定期更新ではありますが、読んで下さる人がいれば幸いです。

邂逅（前書き）

地球のみんな！オラに文才を分けてくれ！

邂逅

「何故だ・・・何故なのだ・・・」

思わず頭を抱えてしまう。だって仕方がないじゃないか。いきなり極寒の雪山に飛ばされたんだぞ？出発点としてはなかなかの部類に入るのではないだろうか。勿論悪い意味でだが。

これはアレか、あの爺さんなりのお茶目だというのか。もしくは本当にうっかりを犯してしまったのか。それともこの身の不運によるものなのか、幸運Eは伊達ではないと。

・・・考えるのは止めよう。どうせ答えなど出ないのだから。この上空に移されなかっただけマシだったと思うことにする。まずは自分の置かれた状況、そしてこれからの方針について考えなければ。

とりあえず辺りを見回してみる。すると、吹雪のせいで視界は悪いが、洞窟の入り口らしきものを発見できた。ちょうどいい、このまま外で吹雪にさらされているよりは幾分かマシだろう。

そう思い、その場所へと歩を進める。

洞窟の中は思っていたよりも広かった。目の前には奈落へと続いていそうな深い、大きな縦穴がぼつかりと開いており、ところどころに風穴でもあるのか、暗闇が広がっているわけでもない。

攻撃的な獣がいるのではないかと予測していたが、ほかの生物の気配がなかったので、警戒を若干ゆるめ、なるべく風に当たらない一角に腰を落ち着ける。

「トレース、オン
投影、開始」

とりあえず防寒具一式を投影しておく。体温が下がり、満足に体を動かすことができなくなることを避けるための応急措置。

先程から体を動かすのに違和感を感じる。

これの原因については既に予測がついている。あの時、宝石翁は私の魂を人形に固定化したと言っていた。試しに解析をかけてみれば、肉体年齢などは聖杯戦争の時とほとんど変わっていない。凜のことだ、私が動きやすいよう、妥協などせず最高のものを用意したのだろう。そう考えるとこの違和感は新品の道具がぎこちないのと似たようなものであるかもしれない。そうであるならばらくすれば完全に馴染むだろう。・・・違うならにかしら対処を考えなければならぬが。

それに、世界からのバックアップがなくなってしまったことも原因の一つだろう。具体的な期間などもはや覚えていない、気の遠くなるような時を守護者として過ごしてきたのだ。魔力はともかくとして、筋力などの直接肉体に係るパラメータを一時的に上昇させていたものがなくなれば、当然体が重くなったと錯覚するだろう。これについても慣れが必要か。

今の私は生前の、世界と契約する以前とほとんど変わらないといってもいいだろう。

次にこの世界について考えてみる。

ここは異世界とも言っているいいと聞いた。ならば地形や生態系なども元いた世界とは大きく違っている可能性が高い。現に私が洞窟に入った穴の付近には見たこともないような植物が生えていたし、地面には人間と同程度の大きさがあるトカゲのような足跡が残っている。

——もしかしたら、ヒトと呼べるような生物がいなかったかもしれない。

・・・確証も何もないが、可能性として頭の隅に残しておいたほうがいいのかもしれない。この世界において今の私は、生まれ落ちた赤子のように無知なのだから。

「これから先、どう行動すべきか・・・」

とりあえずは下山したいと思うが、土地勘など欠片もなく、外は吹雪いていて視界も悪い。むやみやたらに行動しては本格的に遭難してしまうだろう。・・・既に遭難しているといっても過言ではない状況ではあるが。

下山してからも問題はある。付近に人里らしきものがあればいいが、ない場合サバイバルをすることになる。サバイバルの経験はあるが、生態系が異なっている可能性が高いので、あまり役に立たないだろう。主に食料面で。

色々考えてはみたが、とりあえずは天候が回復するのを待ったほうが・・・

「——ッ！——！」

「・・・む？」

なにか音・・・というよりは声らしきものが外から聞こえた。このあたりの野生動物だろうか。外を見ればいつの間にもやら吹雪はやんでいた。

「少し気になるな・・・。見に行くか」

どのような生物がいるのか見ておくのも必要だろう。可能であれば、食料として肉を採取しておきたいところではある。

そう思い、先程から聞こえる声を頼りに進んでいった。

side ???

「はあっ、はあっ、はっ・・・！」

目の前には見たこともない大型のモンスター。強靱な牙と前足を持ち、その巨体をいかして突進してくる。一撃でもまともにくらえば、その時点で死んでしまうかもしれない。

こちらにも武器は抜いているが、ただただ相手の攻撃を避けてばかりいて、一度も振るわれていない。

間断なく攻撃が飛んでくるわけじゃない。攻撃を打ち込むすぎがないわけじゃない。

——怖い

体が震える。寒さや疲労のせいじゃなく、目の前の圧倒的暴力に恐怖しているから。放たれるプレッシャーは容赦なく私を押しつぶそうとし、アレに近づこうとする意思を根こそぎ奪っていく。

この場における絶対強者。弱者であるわたしには、武器を構える程度の虚勢を張るのが精一杯。

「はあっ、あ、あうっ——！」

足が竦んで思うとおりには体が動かない。疲労が蓄積してさらに動きが鈍くなる。攻撃を避けきことはできず、徐々に増やされる傷に体は悲鳴を上げる。

血が次々に流れ出て、足元の雪が赤く染まっていく。このままではいずれ体が動かなくなるだろう。

——死にたくない

本当はわかっている。自分のこの行為も、わずかな延命措置にしかならないことが。逃げようにも逃げ道などわからないし、たとえばわかったとしてもあの強者は自分を容易く逃がしてくれなどしないだろう。

——死にたくない

やっと、ハンターになれたのに。厳しい訓練も、難しい勉強も、一人前のハンターになるために、必死にやってきたのに。あの時、みんなに誓ったのに。

——死にたくない

ついに体が動かなくなり、前のめりに雪の上へ倒れる。モンスターのほうへ視線を向けると、既に近くまで寄ってきて、その牙を見せつけるかのように口を開いていた。

「・・・たく・・・い・・・」

思わず、ずっと願っていたことを口にしていた。口にしたところで、モンスターに届くはずはないのに。それでも、言わずにはいられなかった。

「死にたく、ないよ・・・」

前足を振り上げるのが見えた。自分の命はあと1秒か2秒か・・・。そんなことを考えているとき。

「その願い、確かに聞き届けた」

そんな声の後、モンスターが悲鳴を上げるのが聞こえた。

邂逅（後書き）

第二話をお届けしました。

やべえ、一人称と三人称が混ざらないように気を付けるのが意外とつらい。こんな調子で大丈夫か？

しかしアレですね。小説を書くときって誰かとネタが被ってないかものすごく心配になりますね。え？ならない？まあじでえ

みなさんお気づきの方もいらっしゃるかとと思いますが、ええそうです、2ndのアレです。ゲームでは速攻でアイキヤーンフライイでしたがいろいろといじってます。

この小説は2nd, 2nd G, 3rdの要素をこっちゃんにして書いていきます。例えば、舞台は2ndでもモンスターが疲労状態になったり。

え？なんでかって？書くネタが増えるじゃないか！文章が増えるよ！やったねたえちゃん！

それでは今回はこのへんで、なにやら間違いなどありましたらご指摘お願いいたします。

離脱（前書き）

これがア！？こんなモノが第三話ア！？

離脱

side シロウ

——危なかった。あと数秒遅れていたらこの人の命はなかっただろう。

全身を覆う分厚い防寒具は、傷のひどさを訴えているかのようにいたるところが引き裂かれ、血で赤く染まっている。怪我をしている本人は気絶したのか、それともわずかな力すらも残されていないのか、先程からピクリとも動かない。どちらにしろ危険な状態であることは違いない。簡単な処置だけでもすぐに施さなければならぬだろう。

今の状況を整理する。

今回の目的は、今私の背後で倒れている人を生存させること。

対峙しているのは恐竜のような生物。突然あらわれた自分を警戒してか、今は唸り声をあげながらこちらを威嚇している。その体からは剣が生え、傷口から流れ出る赤い液体は雪を染めていく。

先程放った矢は三本。^{okou}がら空きだった胴体に一本、命を刈り取ろうとしていた右腕に一本、そして右目に一本。いずれもそれほど高ラックではなく、こめられた魔力も多くはなかったが、奴の皮膚に突き刺さる程度の威力はあったらしい。

後ろは断崖絶壁。私^が通ってきた道も含めて、どの道も目の前の生物が立ちふさがる。けが人を抱えたまま突破するのは決して容易で

はない。

……

「突破口は開けた。せつかくの獲物だが、諦めてもらうぞ」

その言葉を皮切りに奴が動き出した。自身の邪魔をするモノを、仕留めそこなった獲物ごと殺さんとする。ヒトなどには止めることなど出来ぬ、圧倒的な力。

全身に強化をかけ、倒れている人を抱えて崖っぷちまで後退する。

奴が迫る。数秒前まで私たちがいた場所を通過しようとして――

フロークン・ファンタズム
「壊れた幻想」

「五本」の剣を爆発させる。そう、離れる際に魔力を多めにこめた干将・莫耶を新たに投影し足元に仕込んでおいた。刺さった剣の魔力だけでは体勢を大きく崩すのに少々心許なかったのもあるが――

爆発によって奴は大きく体勢を崩し、倒れこむ。同時に粉塵が辺り

一面を覆い、一時的に視界が最悪になった。

——これが狙い目。氷雪に埋もれた地面まで爆発によって吹き飛ばし、相手から視認されないようにする。逃げ道を追いかけられたらたまったものではない。

「少々危ない橋を渡るが、我慢したまえ。…ふっ」

そういつて崖から飛び降りる。

この場に第三者がいたならば気が狂ったかと思うだろう。そこは断崖絶壁。どうみても人が昇り降りできるような所ではない。

しかし、無事に降りる手段があるならば、これが最も速く下山できる方法なのは確か。

そして私には、無事に降りる手段がある。

トレース オン
「投影、開始」

今必要とするのは切れ味と強度を兼ね揃えた一振り。

デュランダル
投影したのは絶世の名剣

聖騎士ローランが所持していたとされ、凄まじい切れ味を誇り、決して折れないという逸話を持つ不滅の聖剣。

「ふんっ！」

それを崖へと突き刺す。落下とともに岩肌は斬り裂かれ、徐々にそ

の速度をおとしていく。

地面が近づく頃には問題ない速さにまで減速し、問題なく着地することができた。

着地と同時にある場所へと走りだす。落下中、強化した眼によってテントを発見することができた。どんな状態であれ、落ち着いて治療できる環境は整うだろう。

——走る。逸る気持ちを抑え、周囲を警戒しつつ進んでいく。めくらましに成功したとはいえ、追ってこないとは限らない。…アレが一匹だけでも限らない。故に、自身の五感すべてを研ぎ澄ませる。

「もうすこしだ、もうすこしだけでもってくれ…」

結論から言えば、テントはすでに放棄された後だった。

しかし、どういうわけか薬や包帯などの医薬品がテント横の箱にある程度残っていたのは嬉しい誤算だった。

自分は治癒魔術など使えない。セイバーとの繋がりもなくなってしまったから、アヴァロンを投影することも不可能。…私だけでは、

止血するのがせいぜいだっただ。

まあ、そんなわけで命の危険はもはやなくなったといっている。彼女の顔色も良くなり、今では穏やかな表情で眠っている。

彼女……そう、私が助けたのは少女だった。

年は十代後半あたりだろうか。流れるような青色の髪は背中の中程まであり、整った顔立ちにはどこか幼さが残る。肌の色は白く、体の線も細い方。一見しただけでは戦いに向いているとは思えないが、体の動きを重くする無駄な筋肉がほとんどないことから、戦えるように鍛えていたことが分かる。

美少女かと聞かれれば、ほとんどの人がそれを肯定するだろう。

…本当に綺麗な顔をしている。あれだけの怪我をしていて、顔に傷がつかなかったのは彼女にとって不幸中の幸いだろう。

…話を戻そう。

彼女の容体はひとまず落ち着いたが、やはり医者には診せるべきだろう。自分は専門家と言えるほどの知識は持ち合わせていないし、そのなけなしの知識でさえこちらの世界でも有効とは限らないのだ。私の下手な治療で後遺症が残るものなら目も当てられない。

そんなわけで今はこのキャンプ(?)をあさっている。この付近の地図があればと探し始めたが、目的は達成できずに時間だけが刻々と過ぎていく。

「…日が傾いてきたか…。野宿は極力控えたかったのだが…」

ここに来るまでに大きな生物の肉を食べている小型の生物の群れを確認した。アレも、こちらを見ると襲ってくるのだらう。一晚寝ずに警戒する。以前に何度も経験したことだが、相手がどんな生物で、どんな手法で狩りをするのかの情報が一切ないのは正直に言えば不安である。それもあってさっさと村に行きたかったのだが…

探し始めて数刻、結局地図らしきものは発見できなかった。

仕方がない。いつになるかはわからんが、この子の目が覚めるのを待つしか――

「！」

なにかが、いる。

辺りに草を掻き分ける音が響き、徐々にそれが大きくなる。まだ姿は見えない。周囲の、自然のまま生い茂った植物がその姿を隠す。

――もし敵になりうるものだった場合、ここで暴れられるのはマズい。

干将莫耶を手に、その音源へと飛び込んでいく。そこにいたのは――

「っ！…驚かさないでくれ、モンスターかと思ったじゃないか」

屈強な体をした、中年の男だった。

男は近隣の村に住んでいるハンターという仕事をしていたが、怪我のために今は引退してしまっただけらしい。

その穴埋めをするため、ドンドルマという都市のギルドに村に常駐させるハンターの斡旋を依頼した結果、一人のハンターがやってくるようになっていたが、到着予定の日になっても一向に現れない。一日二日の誤差は仕方がないと樂觀視していたのだが、それ以降となると流石に心配になり、通るであろうルート周辺をわざわざ出向いて探していたらしい。

おそらくは彼女がそのハンターだろう。武器も持っていたし、体もよくつくられている。

こちらの事情を説明し、村までの案内をしてもらう。聞けば、村まではそう遠くないらしい。

…初めは私もハンターかと聞かれた。当然だろう。武器を持ち、あんな生物が生息しているような危険な場所にいたのだから。

とりあえずは私は旅人だと答えておいた。彼女を助けた経緯については、道に迷い途方に暮れていたときに偶然…、という感じにごまかしておいた。…旅人というのも、あながち間違いではないが。

村が見えてきた。周囲はすでに夕日で赤くなり、村人はその大半が帰宅しているのか、それとも元々人数が少ないのかはわからないが、外にはごくごく少数の人しか見えない。

村の入り口につくと、先導していた男はこちらを向き――

「ようこそ、ポツケ村へ」

そう、満面の笑みで言った。

離脱（後書き）

はい、ということで第三話でした。

やだ……すごく雑……

今回は悩みましたよ、ええ

ヒロインの容姿、とりわけ髪の色に！

うゝんここはやっぱりオーソドックスに金でいくべきか……↓いや趣味に走って青でいくか……↓しかし銀も捨て難い……↓いっそのこと黒か……↓以下略

とまあ、最終的に趣味に走りました。（・ω・）てへっ

次回！ヘッポコ実験小説運命の狩人第四話！

「襲撃」

…これ分かる人いるのかな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6884r/>

運命の狩人

2011年10月8日22時18分発行